

丹波地域の受口状口縁土器

中 居 和 志

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

丹波地域の受口状口縁土器

中居和志

1. はじめに

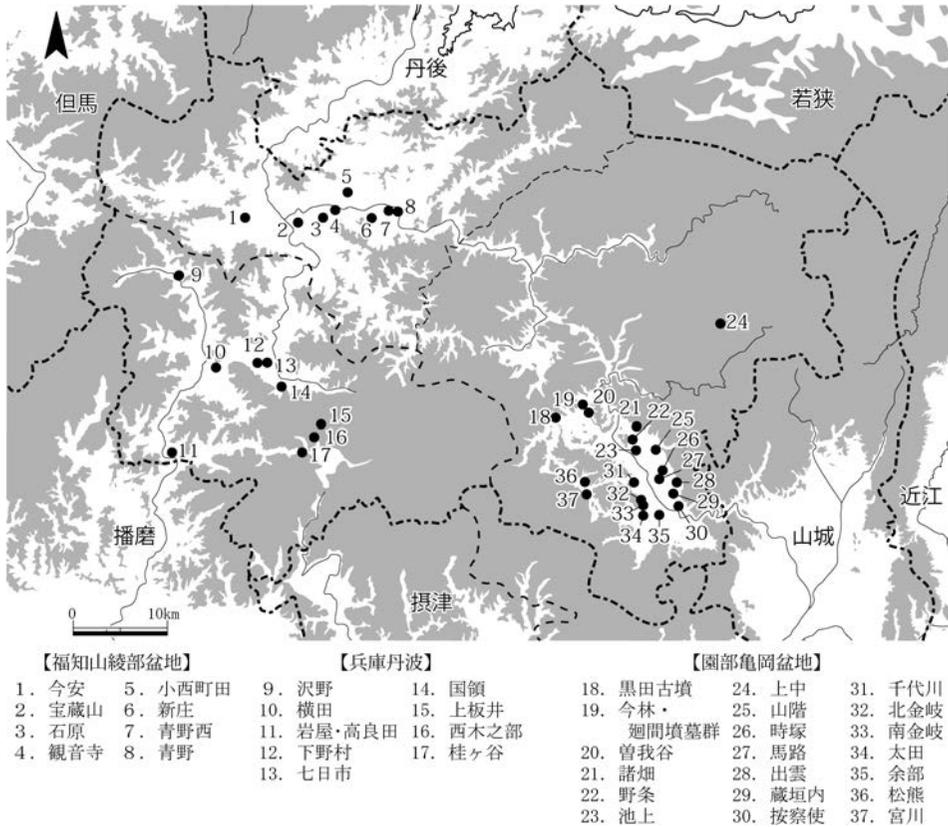
受口状口縁土器は、弥生時代中期から古墳時代前期の古墳出現期にかけての近江地域を代表する土器として認識されており、「近江系土器」として扱われることが多い。受口状口縁土器は、近江地域に集中するだけでなく、近江地域以外にも広く分布することは既存の研究から明らかになっている。そのため、「近江系」という表現が適切ではないことはこれまでも指摘したことがある^(注1)。

本論では、丹波地域における受口状口縁土器の弥生時代後期を中心とした動態を示すことで、受口状口縁土器の地域における受容のあり方を明らかにしていきたい。本論における時期区分は、筆者の近江地域の編年を基本として、弥生時代後期前半をⅠ期、後半をⅡ期、庄内式併行期をⅢ期、布留式併行期をⅣ期と大別する^(注2)。近江地域の編年からは、さらに詳細な時期区分も可能であるが、資料数の限界もあるため大別の時期区分で大まかな流れを捉えていきたい。

2. 丹波地域の地勢と受口状口縁土器

丹波地域は、現在の京都府と兵庫県にまたがる内陸に位置する。地理的には、由良川流域にあたる福知山・綾部盆地、加古川流域と竹田川流域にあたる兵庫丹波地域、桂川流域にあたる園部・亀岡盆地に大別できる(第1図)。加古川流域から由良川流域にかけては大きな峠がなく、本州でもっとも低い分水嶺として瀬戸内地域と日本海側を繋ぐ重要な経路である。一方、園部・亀岡盆地や篠山盆地のような地理的に独立性の高い盆地が点在するのも丹波地域の特徴である。このうち、当該期の丹波地域の中で受口状口縁土器の出土が確認できる遺跡は37遺跡ある。

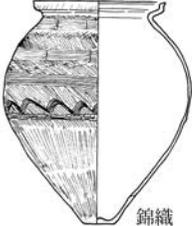
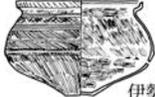
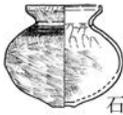
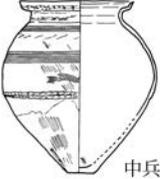
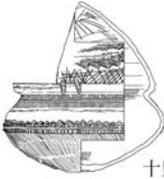
受口状口縁土器は弥生時代中期に出現し変遷していく土器であり、後期には壺、甕、鉢、手焙形土器がある(第2図)。近江地域で一般的な受口状口縁土器の要素は以下の通りである。口縁の形状は口縁端部に面をもつ受口状で、Ⅰ期以前は単純な口縁端部形状であるが、Ⅲ期に向かうほど口縁端部を外面に引き延ばす方向性が強まる。口縁部から体部上半にかけて加飾を多く施す点も特徴的であり、Ⅰ・Ⅱ期にはクシ状工具、Ⅲ期にはヘラ状工具を



第1図 本論関連遺跡(80万分の1)

用いた加飾に変化し、Ⅳ期には完全に無文化する。加飾は直線文、列点文、波状文が基本で、受口状口縁の形態と密接に結びつくため、口縁部が欠損していても受口状口縁土器と判別できる。外面調整は粗いハケ調整で、内面調整はナデか部分的なハケ調整となる。また、外面の最大径付近に突帯を付すものがあり、特に手焙形土器に多い傾向にある。

丹波地域において受口状口縁土器に注目する既存の研究は少ない。弥生土器全体を射程に入れた研究としては、石井による編年をあげる事ができる^(注3)。資料数の限界から丹波・丹後両地域を対象としつつも、南丹波地域(園部・亀岡盆地に相当)に近江地域からの影響が強いことを指摘している。兵庫丹波地域における研究としては、多賀による研究がある^(注4)。Ⅲ期(弥生時代中期)後半以降は播磨地域との共通性が高いが、Ⅴ期(後期)には近畿北部の擬凹線文をもつ土器群に置き換わり、Ⅵ期(庄内式併行期)には山陰・北陸系へと置き換わると指摘した。京都府内の受口状口縁土器に着目した研究としては、國下による研究がある^(注5)。受口状口縁土器を集成し、弥生時代後期に「近江系土器」が増加する点を指摘している。さらに、「近江系土器」の受容について、折衷型しか受容しない「丹後の様相」と、

器種 時期	壺	甕	鉢	手焙形土器
I	 伊勢	 錦織	 伊勢	
II	 石田	 中兵庫	 石田	 十里
III	 正伝寺南	 下長	 木部	 森前・国友

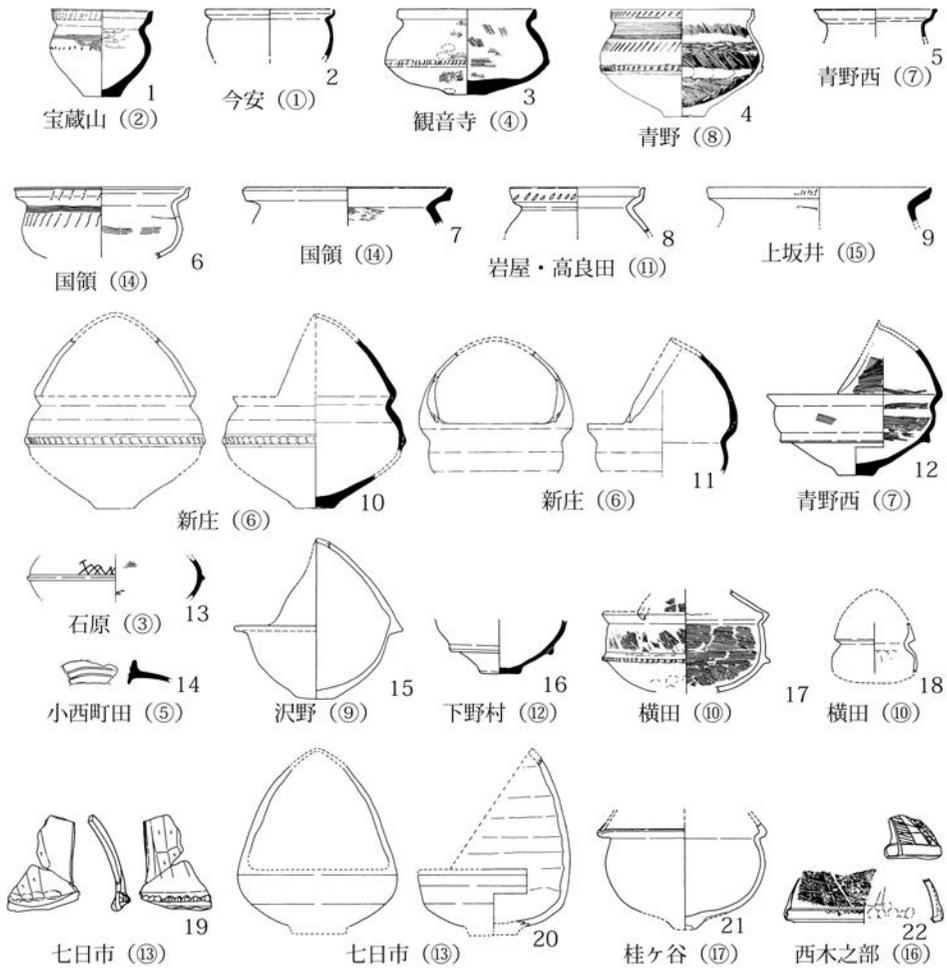
第2図 近江地域の受口状口縁土器(1/10、各土器の右下は出土遺跡名)

近江との結びつきの強い「山城の様相」に区別し、丹波地域についてはその中間の様相と位置付けている。近江地域からの視点としては近藤による研究がある。近江出土の受口状口縁甕について、施文帯が三帯以下を北部の要素、四帯以上を南部の要素とし、近江以外では北部の要素の甕が広がると指摘している。丹波地域への言及はないが、図中には北部の要素の分布域として、丹波地域を含めている。

以上のように、丹波地域では個別の遺跡単位や盆地単位での研究はあるものの、丹波地域全体を見通した研究は低調であり、さらにその中で外来系として扱われる受口状口縁土器について注目する研究は少ない。そこで、丹波地域の受口状口縁土器を集成し、その動向と動態の意味について検討していきたい。

3. 福知山・綾部盆地、兵庫丹波地域の受口状口縁土器

福知山・綾部盆地、兵庫丹波地域における受口状口縁土器の出土遺跡は17遺跡あり、確認できる個体数は22点である。出土遺跡数、出土個体数とも近江地域と比較すると少量にとどまる。それでも、丹波地域の受口状口縁土器が10点未満であることと比較すると多い



第3図 福知山・綾部盆地、兵庫丹波地域の受口状口縁土器
(丸数字は第1図の番号、1/8)

とはいえる。^(注7)

両地域で出土する受口状口縁土器22点のうち、半数以上の13点を占めるのは手焙形土器である。手焙形土器は、Ⅱ期初頭に出現し、近畿地域を中心に土器様相の中に組み込まれた土器である。そのため、近畿地域通有の土器様相としての手焙形土器である可能性が高く、他の受口状口縁土器と同列には比較できない。なお、手焙形土器は、受口状口縁鉢に覆部を付した形態である点と最古段階の分布状況からみて、近江地域が発祥地である蓋然性が高い。^(注8)出現時のⅡ期初頭の手焙形土器は、鉢部が受口状口縁鉢と区別つかない形態である。Ⅱ期初頭以降は近畿地域を越えた広範囲で確認できるようになり、各地の在地の鉢(くの字状口縁鉢など)を採用する個体も多い。

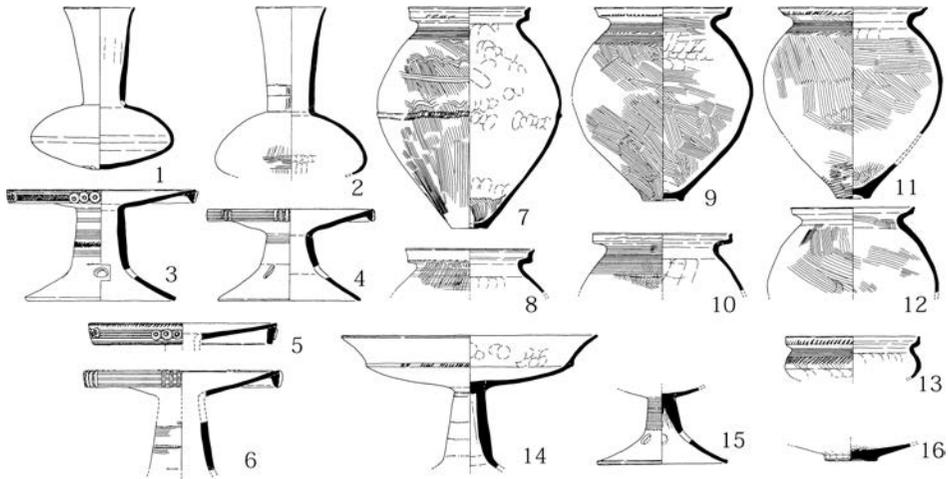
福知山・綾部盆地と兵庫丹波地域で出土する手焙形土器は、鉢部の受口状口縁が崩れているものが多い(第3図10~12、17~22)。また鉢部がくの字口縁の15もある。残りは、全形が不明なものの、覆部端部や突帯の形状から手焙形土器と分かるものである(13、14、16)。10~12、15~22はⅡ期、13がⅢ期、14がⅣ期に該当する。10は、全体の形態が近江地域の手焙形土器と近似するが、鉢部の口縁はくの字状であり、受口状口縁鉢からは変化した形態である。そのため、近江地域と近親性が高いといえる個体はないといえる。

手焙形土器以外に確認できる受口状口縁土器には、甕(5、7~9)と鉢(1~4、6)がある。1がⅠ期、4、6~9がⅡ期、2、3、5がⅢ期に該当する。甕には口縁外面の加飾の有無に差がある。9は、口縁端部を摘み上げる在地的な甕の外面に受口状口縁甕と共通した直線文と列点文を施す。鉢は、外面に加飾を施すもの(1・4・6)と無文のもの(2・3)がある。4は口縁部の形状、加飾、突帯とも明瞭ではあるが、完形品でない点からすると手焙形土器の可能性はある。1は、形状が在地の甕に近いものの、受口状口縁土器と共通する加飾をもつ。1・9のように、受口状口縁土器とは異なる形状の土器に受口状口縁土器と同様の加飾を施す土器は近江地域でも確認できる。近江地域のⅠ期前半を代表する資料である服部遺跡SD201においても、凹線文の系譜を引く甕に受口状口縁土器と同様の加飾を施す個体がある^(注9)。受口状口縁土器と同等の加飾を、器形を越えて施す行為が近江地域以外にも広がることを示す重要な資料といえる。

4 園部・亀岡盆地の受口状口縁土器

園部・亀岡盆地における受口状口縁土器の出土した遺跡は22遺跡あるが、各遺跡はそれぞれ一定程度の距離が離れているため別々の集落といえる。資料化されて確認できる個体数は202点あり、壺19点、甕128点、鉢33点、手焙形土器22点を確認できる。福知山・綾部盆地、兵庫丹波地域と比べて遺跡数は多くないが、盆地の面積が限られることを考慮すれば、分布密度と個体数の多さが分かる。また、未報告資料の中にも多くの受口状口縁土器があり、実数はさらに多い可能性が高い^(注10)。福知山・綾部盆地、兵庫丹波地域と異なり、手焙形土器の比率は高くなく、他の器種もまんべんなく存在している。紙幅の都合もあるため全ての受口状口縁土器を掲載できないが、近江地域からの搬入品以外にも近江地域と近似した土器が多い傾向にある。

園部・亀岡盆地の受口状口縁土器の様相を代表するのが亀岡市出雲遺跡第11次SH01出土資料である^(注11)(第4図)。SH01は多角形の堅穴建物で、床面直上から一括して各種土器が出土しており、有稜高杯の形状からみてⅡ期初頭の土器群である。未報告資料も含めた全点を現物確認した。なお、SH01には古墳時代中期の堅穴建物が重複しているが、土器は

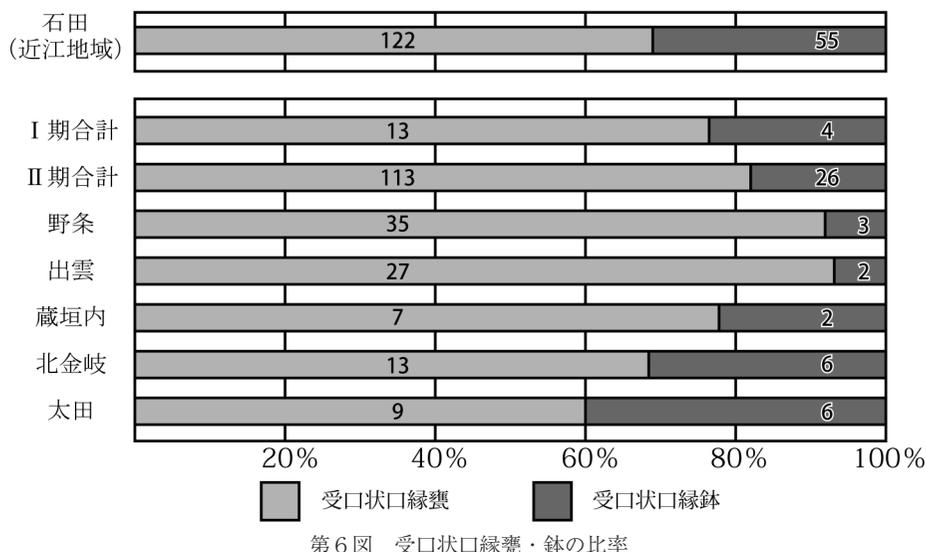
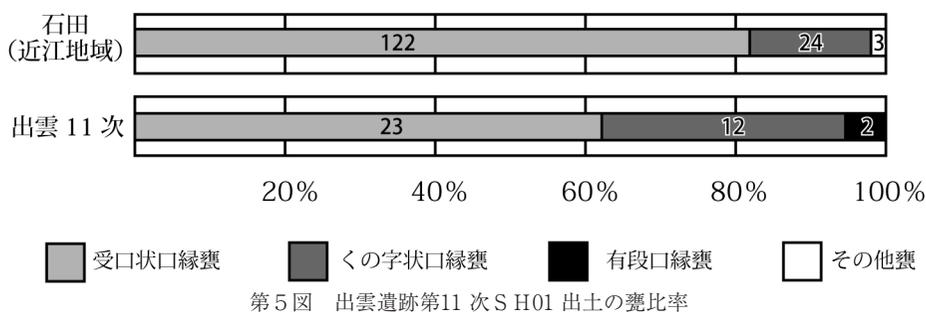


第4図 出雲遺跡第11次調査S H01 土器(1/8)

明確に峻別できる。壺は算盤玉形の体部をもつ細頸壺が2個体あり、底部の形状からみて器台と組み合うものである(1、2)。この形態の細頸壺は近江地域に特に多い傾向にある。細頸壺と組み合う器台は、受部と脚部の屈曲部が上半にあり、脚部がゆるやかに外反する(3～6)。これらはI～II期に近江地域から東海地域にかけて盛行する器台の特徴である。甕は、図化されている6個体のうち7・8が胎土からみて近江湖南地域の搬入品である。8は図化されていない同一個体の底部があり、7と同様に器壁の薄い上げ底である。一方で在地の胎土の個体(9～12)は、近江湖南地域の典型的な受口状口縁甕とは異なるものが多い。9・11・12は口縁部の立ち上がりが低く加飾が口縁部付近のみで、11にはタタキ調整を施す。口縁部付近のみの加飾は、近藤の指摘する加飾帯が三帯以下の「北部的要素」に該当する。口縁部の立ち上がりが低い甕は、近江地域では主流を占めない。また、タタキ調整を施すことも基本的にはない。そのため、全体的には近江地域の土器群と近似しているが、詳細に見ると近江地域とは差異があるといえる。

これらの土器群が近江地域と近親性をもつのか確認するため、未報告資料分も含めた甕の種類別の個体数を比較する(第5図)。近江地域との比較のため、II期の近江地域を代表する資料である石田遺跡(東近江市)の甕の比率も提示する。なお、当該期の近江地域では、多くの遺跡で石田遺跡と類似した比率になることをすでに確認している。^(注12)

出雲遺跡では、受口状口縁甕が全体の60%以上を占め、次いでくの字状口縁甕が30%強、そして園部・亀岡盆地以外の丹波地域で通有の有段口縁甕が少量ある。出雲遺跡の方が受口状口縁甕の比率が低く、くの字状口縁甕が多い点は地域的な特徴を示している可能性が高い。



さらに、丹波地域において一定量の受口状口縁甕・鉢が出土している遺跡での受口状口縁甕と受口状口縁鉢の比率を比較する(第6図)。受口状口縁鉢は慣例的に「鉢」と呼称しているが、近江地域では小型の煮沸具として用いており、外面にススが付着する個体が大抵である。当該期の近江地域では、受口状口縁甕に対する鉢の比率が約2～3割と一定になる傾向にある^(註13)。比較のため、ここでも石田遺跡の比率を提示しておく。

園部・亀岡盆地の受口状口縁甕に対する鉢の比率は、約1～4割とやや幅がある。ただし、鉢の比率の低い野条遺跡と出雲遺跡は、口縁部の小片まで対象としているため、甕と鉢の区別がつかないものが多い。実数としてはもっと鉢を含む可能性がある。また、鉢の比率の高い太田遺跡では、全体の個体数の少なさが影響している可能性がある。そのため、総体としては約2～3割の比率に納まり、近江地域と近似していると評価できる。また、園部・亀岡盆地全体の個体数でも、I・II期とも鉢の比率は2割前後に納まる。さらに、園部・亀岡盆地出土の受口状口縁鉢には、外面にススが付着する個体が多く、近江地域と

同様に煮沸具として利用していたことが確実である。

受口状口縁甕に対する鉢の比率が遺跡に関係なく一定なのは、煮沸具としての機能差に起因している可能性が高い。つまり、調理方法と食材に応じた使い分けのために鉢が一定量必要であったことを示している。両者の比率が近江地域と園部・亀岡盆地で同様なのは、特定の調理方法を共有しており、ひいては食文化としての共通性が高かったといえるであろう。

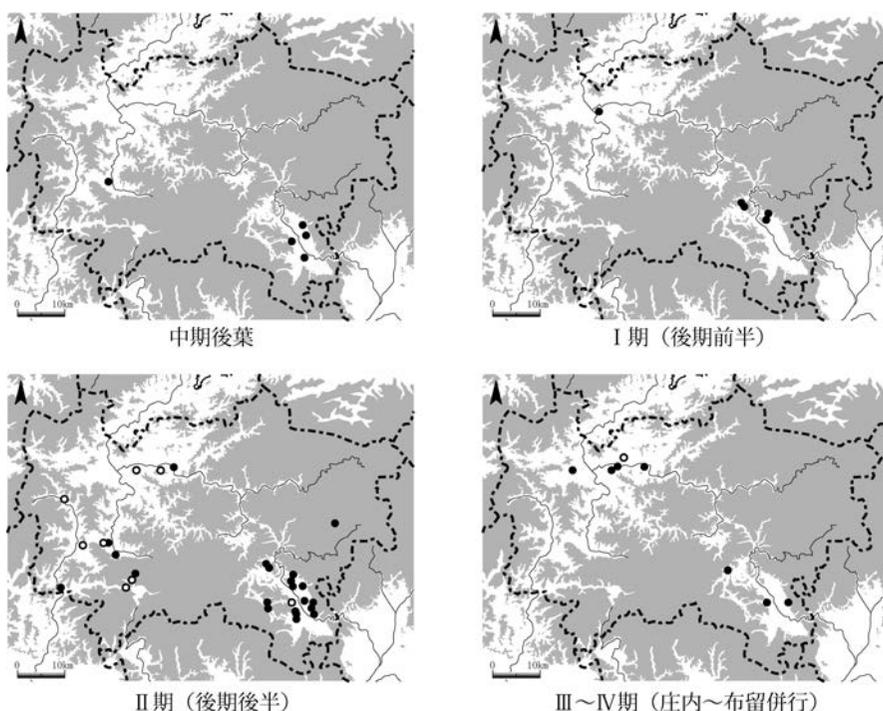
以上からみて、園部・亀岡盆地のⅡ期の資料は、地域的な特色もありつつ、受口状口縁土器以外も含めてかなり近江地域と近似した土器様相であるといえる。ただし、搬入品が少なく在地生産の土器が主流を占めているという点は注意すべき点である。

5. 受口状口縁土器の動態

丹波地域における受口状口縁土器の出土遺跡を時期別に示したのが第7図である。出土遺跡がⅡ期に集中していることがわかる。分布状況からは、中期以来散在的に存在していた受口状口縁土器が、Ⅱ期に急速に増加し面的に広がり、Ⅲ～Ⅳ期に減少して中期やⅠ期の状況と同様の状況に戻ることが分かる。時期ごとの時間幅が等間隔とは言い切れない点や時期別の集落密度の違いを考慮する必要があるものの、それでもⅡ期に集中する傾向には変わらないであろう。

Ⅱ期の受口状口縁土器の分布は、園部・亀岡盆地に集中しており、福知山・綾部盆地や兵庫丹波地域とは大きく異なる。Ⅱ期の福知山・綾部盆地と兵庫丹波地域では、受口状口縁土器が増加したようにも見えるが、手焙形土器が増加したためである。その手焙形土器は、前述のように近江地域の受口状口縁鉢から乖離した形態が多い。つまり、受口状口縁土器が集中するは園部・亀岡に限られるといえる。Ⅲ～Ⅳ期には、園部・亀岡盆地よりも福知山・綾部盆地で受口状口縁土器を確認できる遺跡が多い。福知山・綾部盆地では、Ⅱ期よりも増加傾向にあり、急速に減少する園部・亀岡盆地とは対照的である。ただし、受口状口縁土器の出土点数は園部・亀岡盆地よりも少なく、分布密度は低いといえる。

園部・亀岡盆地で多量に確認できる受口状口縁土器は、出雲遺跡第11次調査の例でわかるように、在地化したものが主体を占める。一方で、甕と鉢の比率は近江地域と近似しており、煮沸具の使用法も近江地域と近似していたといえる。こうした状況は、近江地域からの強い影響を受け土器様相が置き換わったという説明になり、人の流入を考えるのが一般的であろう。それならば、受口状口縁土器が急増する弥生時代後期後半の初頭に、搬入品や搬入品に近似した個体が多く出土するはずである。しかし、実際には多少の搬入品が確認できる以外、搬入品とは異なる在地製作の土器が主体を占める。そのため、実際の人



第7図 時期別出土遺跡(160万分の1、白丸は手焙形土器のみ)

の動きは大きくなく、在地の人々が主体となって、受口状口縁土器をはじめとする近江地域の土器様相を受容したといえる。この受容は、単なる形の模倣ではなく、受口状口縁鉢を煮沸具として用いるように、調理方法まで含めた総合的な食文化の受容といってもよいであろう。^(註14)

出雲遺跡の甕の比率からは、近江地域よりもくの字状口縁甕が多い傾向がわかる。また、有段口縁甕も少量ながら確認できる。こうした点は近江地域とは異なる点であり、園部・亀岡盆地の独自性を示しているといえる。受口状口縁鉢を近江地域と同様に小型の甕として使用したように、くの字状口縁甕や有段口縁甕もそれぞれ特定の調理方法に対応し使用していた可能性がある。甕の種類の違いが調理方法の違いに起因するならば、当該期の各地の土器群に他地域由来の多種類の甕を含む理由となりうる。一方で、手焙形土器よりも少数しか確認できなかった受口状口縁壺は、元々II期になると近江地域でも減少傾向にある上、甕とは用途が異なるためにII期でも数量が限られるといえる。受口状口縁土器の受容のあり方として注目できる点である。

6 おわりに

丹波地域は、畿内地域と瀬戸内地域と北近畿地域という特色のある土器様相をもつ地域の上に位置し、山地の間に盆地が点在するという地理的特性もあって、一つのまとまりのある地域として捉えづらい地域である。本論で対象とした弥生時代後期から古墳出現期にかけての丹波地域は、受口状口縁土器という視点からみても盆地などの小地域ごとに異なる動態を示しており、地理的状况を反映しているといえる。

その中でも園部・亀岡盆地は、弥生時代後期後半のⅡ期に集中して受口状口縁土器を多量に用いている点特徴的である。単純に近江地域との距離が最も近いためともいえるが、盆地内の出土数量や出土遺跡の傾向に差異が少ない一方で、他の丹波地域の小地域との差異は大きい。つまり、近江地域からの地理的勾配だけでは説明がつかない状況にある。また、Ⅱ期の受口状口縁土器が多量に出土する園部・亀岡盆地では、受口状口縁甕・鉢の比率からみて、調理方法ひいては食文化まで近江地域と共有しているといえることは特筆できる点である。

本論では丹波地域の受口状口縁土器からわかる地域間関係について検討してきた。受口状口縁土器に限らず、土器は時間の物差しとして用いられる反面、土器から当時の社会を読み取ることが自分自身を含めて十分にできているとは言い難い。土器の変化や共通化が何を示し、どのような社会変化を反映しているのか、今後も検討を進めていきたい。

(なかい・かずし = 京都府教育庁文化財保護課副主査)

- 注1 中居和志2016「近江系土器と受口状口縁土器」『古墳出現期土器研究』第4号 古墳出現期土器研究会 pp.73-80
- 注2 中居和志2010「古墳出現前後の近江地域 - 土器編年を中心に -」『立命館大学考古学論集』V 立命館大学考古学論集刊行会 pp.125-148頁
- 注3 石井清司「丹波・丹後」1989『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社 pp.304-317頁
- 注4 多賀茂治2000「兵庫丹波における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XXⅡ pp.1-20、多賀茂治2012「兵庫丹波における弥生土器の様相(予察)」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第2号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 pp.21-30
- 注5 國下多美樹1989「近江系土器について」『京都府弥生土器集成』(財)京都府埋蔵調査研究センター pp.84-128頁
- 注6 近藤広2001「弥生後期における受口状口縁土器の様相 - 近江の地域区分と他地域への影響 -」『西田弘先生米寿記念論集 近江の考古と地理』西田弘先生米寿記念論集刊行会 pp.91-100
- 注7 中居和志2016「丹後半島周辺の受口状口縁土器の動態」『京都府埋蔵文化財論集』第7集(公財)京都府埋蔵調査研究センター pp.146-248

- 注8 中居和志2021「近江地域の手焙形土器」『滋賀県立大学考古学研究室25周年記念論集(仮)』(2021刊行予定)
- 注9 大橋信弥・山崎秀二ほか1987『服部遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 pp.170-189
- 注10 亀岡市南金岐遺跡の未報告資料で特に多く確認している。
- 注11 藤井整2009「出雲遺跡第11次調査」『京都府埋蔵文化財調査報告書(平成20年度)』京都府教育委員会 pp.55-64
- 注12 中居和志2013「古墳出現期における受口状口縁土器群の動態」『立命館大学考古学論集』Ⅵ 立命館大学考古学論集刊行会 pp.219-230
- 注13 前掲注11と同じ
- 注14 出雲遺跡例とほぼ同時期の野条遺跡第7次S H0301では有段口縁甕の比率が高い。そのため、園部・亀岡盆地のすべての遺跡に当てはまるとまでは言えない点は注意が必要である。